

『枕草子』の書名と跋文についての試論

武田 早苗

はじめに

『枕草子』の諸伝本の中で、雑纂本と整理された系統⁽¹⁾の本には跋文と呼びならわされている文章が付されている。これが当作品の成立・執筆時期などについても重要な情報を含んでいることは広く知られている。その議論の内容は多種多様であり、跋文をどのように解釈するかは、当該作品全体をどう位置付けるかや本作品の成立時期⁽²⁾という大きな問題とも表裏一体のものである。本稿で、それらの大問題に決着を付けることは到底できない。だが、それらについて考える端緒として、跋文に描かれている場の問題とそれと関連すると思われる書名との関わりについて論じてみたい。

一

『枕草子』雑纂本系統に分類されている伝本には、跋文と通称される文章が付されている。この跋文と呼ばれるものは全部で三種類ある。能因本⁽³⁾には「長跋」と通称される分量的にも長いものと、「短跋」と呼ばれる短いものの二種が見える。三卷本系は一種で、これが最もよく知られている跋文である。この三卷本の跋文は、内容から通常四段落に分けられる⁽⁴⁾。この中で、書名と関わるのは、次の二段落目にあたる。

宮の御前に内の大臣の奉りたまへりけるを、「これに何を書かまし。上の御前には史記といふ文をなむ、書かせたまへる」などのたまはせしを、「枕にこそは侍らめ」と申ししかば、「さは得てよ」とて

給はせたりしを、あやしきをこよや何やと、つきせ
ずおほかる紙を書きつくさむとせしに、いと物おほ
えぬ事ぞおほかるや。

ここで発せられた「枕にこそは侍らめ」が、当該作品を
『枕草子』と呼ぶことと関連していることは言を俟たな
い。しかしながら、この「枕」が何を意味するのかにつ
いては諸説あり、いまだ定まらない。『新編全集』⁽⁵⁾の解説
がそれまでの諸説整理をしているので、次にそれを掲出
しておこう。

- (1) 備忘録、手控え、心覚えのメモ。
- (2) 大切な、人に見せるべきではないもの。
- (3) 寝具の枕。

(4) 枕詞、題詞。

(5) 枕ごと、枕詞は過分の中心となるものであるか
ら、「枕草子」はそれを書き集めたもの。

(6) 「史記」(敷き) に対して「枕」(頭) を掛詞とし
て、枕詞の意。

(7) 『文選』二三『設論』の「徒ニ経ヲ枕ニシ、書ヲ
藉キ、衡門ニ紆体スルヲ楽シム」による。

(8) 白楽天の「秘省後序」の「白頭ノ老監書ヲ枕ニシ
テ眠ル」による。

如上を受け、三田村雅子氏⁽⁶⁾、坏美奈子氏⁽⁷⁾が跋文中の「枕」
は「寝具の枕」の意であるとし、さらに津島知明氏⁽⁸⁾が諸
説の詳細な整理を提示して、「枕」は枕詞「しきたへの」
が導き出した「寝具の枕」であると結論づけた。確か
に、本作品成立以前の「枕」という語を調査してみ
ても、「歌枕」「手枕」「草枕」「枕言」⁽⁹⁾などの用例を除くと、
「枕」単独で「寝具の枕」の意以外で使用されている例
は管見に入らなかった。すなわち、「枕にこそ侍らめ」
の「枕」は「寝具の枕」を意味するということであり、
片桐洋一氏⁽¹⁰⁾の「歌枕」説、さらには五味文彦氏⁽¹¹⁾の「四季」
説も首肯し難いこととなる。

しかしながら、これが単純に「寝具の枕」だけを意味
するかというところという訳ではないであろう。ではその
奥にどのような意味を読み取るべきかについては、前掲
の三氏の意見も一致してはいない。三田村氏、坏氏は次
のように説かれた。

・三田村氏⁽¹²⁾

その場の洒落と解すべきものであって、いわば
内容については、清少納言にそのすべてが委ね
られているところに、この草子下賜の焦点があ
るのである。

・坏氏⁽¹³⁾

相当な分厚さであったろうその草子を「寝具の枕」と、清女は表現して見せたのではないか。下問に対して、「全く新しいものを書く」という含意ある答え。

この両氏の説を津島氏は「内容非限定」と一括された上で、「伊周献上の料紙が下賜される時点で、「枕草子」は世に知られていた」として、「初稿本枕草子を踏まえてこそ成り立つ対話」だとされ、次のように述べている。

「史記」から「枕」へという連繋が、万葉以来の歌語「しきたへの枕」を想起させ、そこに秀句的な文脈が形成されていることは認めてよい。だが先述のように、それだけで下賜に至るほどの答えとは見なせない。「しきたへの枕」はスパイスのようなもので、「枕にこそは侍らめ」の「枕」は特定の内容を備えた書き物、「枕草子」なる書名を指すと思われる。ただしそれは諸注の説くような普通名詞でも、備忘録や手控えの意でもない。これまでの考察を踏まえれば、この料紙拝領の時点で、清少納言が里で仕上げた初稿本は世に知られていたのだ。「枕草子」⁽¹⁴⁾とは経房が持ち出した「この草子」にほかならない。⁽¹⁵⁾

つまり、この折、すなわち三卷本跋文二段落目の時点で、すでに初稿本『枕草子』が成立していたと主張する。だが、もしこの時初稿本『枕草子』がある程度成立していたのなら、跋文二段落目に記されている場合は茶番であったようにも見えてしまう。この点については次節にて考察を加えたい。

そこでここでは先に、『史記』から導かれた「枕」であることについて考えてみたい。津島氏が述べられたように、『史記』から「しきたへの」という枕詞が想起され、「枕」が導かれたとするのはしぜんな流れで、理解しやすい。だが、ここで少し見方を変えてみたい。この答えは、定子の問いかけに端を発しているからだ。「枕」の意味を考えるにあたり、定子の問いかけに、もう少し注意する必要があるのではないか。

定子は、一条天皇側が「史記といふ文をなむ、書かせたまへる」と、女房達に語りかけている。『史記』は「しき」であり、そこから枕詞「しきたへの」が想起され、導かれたのが「枕」である。もちろん、三田村氏の言われるように、表面的には洒落の要素は充分にあったに違いない。ただ、ここで重要なのは、一条天皇側との対応関係ではないだろうか。対抗や拮抗ではなく、天皇に対

はないのは当然で、「古今をや書かまし」という問いに
対し、「枕にしはべらばや（枕にしとうございます）」と
受けたことで、『古今集』ではなく、別のものをと主張
したことになる。そしてこれにより、定子も、「枕」と
答えた清少納言の真意をきちんと了解したに違いないの
だ。つまり、「枕にしはべらばや」とは単に寝具の枕だ
けを意味したものでない。前掲した対比、すなわち定子
本人もいまだ明確に自覚してはいない深意めいたものを
察し、さらにはそれを確かなもの、「枕」という語で明
示したのである。この「枕」は寝具の枕だけでなく、新
しいジャンルの作品を創造して書くべきであるというこ
とを意味している。そしてこの発言をした清少納言の意
を了解したのは定子ばかりではない。おそらく周囲に
いた女房の大方もそれを理解したはずだ。何故なら『史
記』を写するほどの大量の新しい料紙を一人の女房に
与えることは、周囲の容認なしにはあり得ないからだ。
実際はどうであったかは分からないが、少なくとも能因
本の長跋を読むとそう解釈できる。ここまでは坏氏の主
張に最も近い。

しかしながら、「何々を書くにあえて答え」ず、「全く
新しいものを書く」と提言をしたとする坏氏の見方にも

全面的には賛同しかねる。なぜならば、清少納言が新し
いものを書くことを買って出たという図式になるから
だ。清少納言と定子の関係は主人と女房としては、ある
意味特別なものであったかもしれない。だが、それはあ
くまで定子の意に沿った発言や行動を清少納言がしたか
らに他ならない。さらに言えば、天皇側によって導かれ
た中宮側としての所為である。この場面での清少納言の
言動を、津島知明氏¹⁷は、「秀句的な文脈」と評している。
しかしながら、清少納言だけが優等生であることをサロ
ンの主である定子が許さなかったことは、「職の御曹司
におはします頃、西の廂に」の段からも明らかである。
清少納言が雪山の賭けに勝つことを確信した中宮は、雪
山撤去を命じている。また、「五月の御精進のほど」の
段の後半部にある庚申の夜には、和歌を詠まないことを
一旦許した定子が、結局は、「その人の後といはれぬ身
なりせば今宵の歌をまづぞよままし」という一首を清少
納言から引き出している。もちろん、その場で行われて
いた題詠はしなかったものの、詠歌拒否の姿勢は崩れて
おり、結局は和歌を詠まないという意志は貫徹されては
いない。

つまり、能因本の長跋にあったように、『古今集』、あ

るいは「『史記』といふ文」というヒントを得た清少納言がそこから解答を見事に導いてみせたことを伝えるのが、跋文、特に三卷本跋文二段落目であると解釈したい。そしてこれにより、定子とその周囲にいた女房達がこの大量の料紙に何を書くべきかを共有したとみておきたい。そうだとすると、この時すでに清少納言が初稿本『枕草子』を執筆していたという津島氏のような御説が出てくるのも当然のようでもある。これについては次節にて考えてみたい。

二

先に触れたように、津島氏は、跋文二段落で展開されている問答の時点で、すでに初稿本は成立しており、それを前提にしたやり取りであると説かれている。しかしながら、前述したように、「何をか書かまし」と発した定子の心中には対比の構図がおぼろげながらあったには違いないが、いまだ確たる完成形は見えていなかったようだ。なぜなら三卷本・能因本の跋文双方に、定子は、「うへの御前には史記といふ文」を書かせたと述べているからだ。「『史記』といふ文」と述べているのは、それ

が漢籍であることを明確に表している。もちろん「しき」という音だけで『史記』が浮かばないからとも考えられるが、いくら漢籍関係に疎いという前提の女房達であつても、『史記』が漢籍であることを知らない訳はない。一条帝側の漢籍『史記』書写に対し、こちらはどのようなかという問いかけであることは明白であろう。

また、すでに初稿本『枕草子』が成立していたとするならば、この場のやり取りは結論が見えていたということになる。草稿の段階だから秘匿されていて、他の女房達はまったく知らなかったという想定は不可能ではないが、狭い女房世界ではやや無理があるように思われる。つまり、この時の定子の問いかけにより、優れた、あるいは予想以上の解答を導き出した清少納言に、その責任を取って作品を書きなさいと料紙が下賜されたとみるのがもっともしぜんである。もちろん、清少納言が文章に長けていることは定子サロンではすでに知られていたはずであるし、あるいはごく一部のメモ的なものは書かれていたことは否定できない。だがここで注意したいのは、料紙を与えられた清少納言に課されたのは、新しいジャンルの新しい作品であり、創作性の高い物でなければならなかった。なぜならそれが一条天皇に対応して中

宮として定子側が取るべき姿勢だからだ。

では、なぜこの段階での初稿本成立という説が出てくるかと言え、三巻本跋文の四段落目に次のようにあるからだ。

左中将まだ伊勢の守と聞こえし時、里におはしたりしに、端の方なりし畳をさし出でしものは、この草子載りて出でにけり。まどひ取り入れしかど、やがて持ておはして、いと久しくありてぞ返りたりし。それよりありきそめたるなめり、とぞ本に。

この時点では、「初稿本」が成立していた可能性は高い。左中将が持ち出したものが世に知られたとあることからすれば、すでにある纏まりをもっていたもの——現在のものからすれば一部ではある——があつたはずだと想定できるからだ。これは、次のように跋文の一段落目の内容とも呼応する。

この草子、目に見え心に思ふ事を、人や見むとすると思ひて、つれづれなる里居のほどに、書きあつめたるを、あいなう人のために便なき言ひ過ぐしもしつべき所々もあれば、よう隠しおきたりしと思ひしを、心よりほかにこそ洩り出でにけれ。

傍線部は、確かに四段落目に書かれた事柄の後に生じた

ものだ。しかもここで「つれづれなる里居」とあることからすれば、従来言われているように、長期の里居である長徳二年を意味しているに違いない。そうだとすると、一段落目は、四段落目の左中将が持ち出したことを前提として書かれていることとなる。

そこで津島氏は、四段落に分割できる跋文を他章段と絡め、執筆と流布の経緯を次のごとく七点に整理した。

①長徳二年（六月以降か）清少納言は里に下がっていた（137・一三八段）¹⁹。

②中宮は紙や畳を贈って帰参を促すが、戻らなかった（259・二六一段）。

③里にあつて「この草子」の執筆に勤しんだ（跋文）。

④執筆した「この草子」は経房によつて持ち出された（跋文）。

⑤（草子を目にしたであろう）中宮は、頃合を見て再び帰参を促す（137・一三八段）。

⑥長徳三年の山吹の咲く頃（晩春か）帰参が果たされる（137・一三八段）。

⑦評判になった自身の草子を、まとめ直し、あとがきも付した（跋文）。

さらに津島氏は、料紙が二種類あつたと仮定する。つま

り、初稿本は②「わろかめれば」(259・二六一段)とある料紙であり、浄書は、「伊周献上の料紙」で、「初稿本流布の後、前掲⑥と⑦の間に清少納言に下賜されたものと見なされる」と結論づけたのだ。つまり、跋文二段落目の場面は、長徳二年の里居を経て、長徳三年の帰参が果たされた後のことと想定する。そして、これまでこのような想定がなされなかったのは、伊周の「内のおとど」という呼称が重視されたためだと述べる。伊周が内大臣だったのは、正暦五年(九九四)八月から長徳二年(九九六)四月までであったからだ。

しかしながら、跋文には確かに「内の大臣の奉らせたまへりける草子」と記されている。もちろん『枕草子』の呼称が当時を反映したもののばかりでないことは承知しているものの、やはり内大臣である伊周が献上した大量の美しい料紙という記述を重視したい。官位表記ということで言えば、跋文四段落目にある「左中将まだ伊勢の守と聞こえし時」と記された経房も問題になるが、これについては赤間恵都子氏⁽²⁰⁾が、経房は史実と合致しない呼称が用いられていることを詳細に分析されており、それに従いたい。

そこで跋文の時間と作品成立の経緯を次のように考え

てみた。

ア、料紙下賜の意向が示される(跋文二段落)

イ、長徳二年(六月以降か)清少納言は里に下がっていた(137・一三八段)

ウ、料紙拝領(259・二六一段)

エ、「初稿本」成立

オ、左中将が持ち出した(跋文四段落)

カ、この草子は「つれづれなる里居のほど」に書いたものだが、「漏れ出」た(跋文一段落)

キ、「おのづから思ふことをたはぶれに書きつけ」

たのが流出した(跋文三段落)

津島氏の想定と相違するのは、下賜された料紙は一種類だったと考える点と『枕草子』の直接の執筆動機を跋文二段落目にあると考える点だ。

料紙を一種類と考えるのは、長跋では、

「さらば得よ」とて給はせたりしを、持ちて、里にまかり出でて、御前わたりの恋しく思ひ出でらるる事あやしきを、こじや何やと、つきせずおほかる料紙を書きつくさむとせしほどに、いとど物おぼえぬ事のみぞおほかるや。

とあるからだ。このままだとすると、その場で下賜され

たようでもある。しかしながら、この後すぐにすべての
拝領料紙を持って里下がりをしたとすると、259段で定子
から料紙が届けられたという記事と齟齬する。とすれ
ば、跋文二段落目の時点で形だけ（ほんの一部か）渡さ
れ、長徳二年の里下がり後にそのほとんどが里に届けら
れたと考えるのが妥当ではないだろうか。そう考えるの
は、跋文二段落目の場が『枕草子』という作品の執筆へ
と強く作用したと考えるからだ。跋文二段落目と他の段
落とでは、流れる時間や清少納言の居所などが異なっ
ている。そのため、萩谷朴氏²¹によりこの二段落目は、「興
味本位の虚構的な創作」と断定されたこともある。だ
が、この段落をまったくの虚構としてしまうことにはや
はり賛同しかねる。虚構を記す意味が見出せないから
だ。ただし、跋文二段落目が他と異なった時間が流れて
いることは、使用された助動詞を辿っても首肯できる。
煩雑だが、三巻本の跋文全文にある過去を表す助動詞
「き」「けり」に印をつけて掲出してみよう。

この草子、目に見え心に思ふ事を、人やは見むと
すると思ひて、つれづれなる里居のほどに、書きあ
つめたるを、あいなう人のために便なき言ひ過ぐし
もしつべき所々もあれば、よう隠しおきたりと思ひ

〔し〕を、心よりほかにこそ洩り出でに〔けれ〕。

宮の御前に内の大臣の奉りたまへり〔ける〕を、「こ
れに何を書かまし。上の御前には史記といふ文をな
む、書かせたまへる」などのたまはせ〔し〕を、「枕
にこそは侍らめ」と申し〔しか〕ば、「さは得てよ」と
て給はせたり〔し〕を、あやしきをこよや何やと、「つ
きせずおほかる紙を書きつくさむとせ〔し〕に、いと
物おぼえぬ事ぞおほかるや。

おほかた、これは世の中にをかしき事、人のめで
たしなど思ふべき、なほ選り出でて、歌などをも、
木、草、鳥、虫をも言ひ出だしたらばこそ、「思ふ
ほどよりはわろし。心見えなり」とそしられめ、た
だ心一つにおのづから思ふ事をたはぶれに書きつけ
たれば、物に立ちまじり、人並み並みなるべき耳
をも聞くべきものかと思ひ〔し〕に、「はづかしき」
なんどもぞ、見る人はしたまふなれば、いとあやし
うぞあるや。げに、そもことわり、人のにくむをよ
しと言ひ、ほむるをもあしと言ふ人は、心のほどこ
そおしはからるれ。ただ、人に見えけむぞねたき。
左中将まだ伊勢の守と聞こえ〔し〕時、里におは
したり〔し〕に、端の方なり〔し〕畳をさし出で〔し〕もの

は、この草子載りて出でに^{けり}。まどひ取り入
れ^{しか}ど、やがて持ておはして、いと久しくあり
てぞ返りたり^し。それよりありきそめたるなめ
り、とぞ本に。

二段落目と四段落目に過去の助動詞が頻出しているのは
一目瞭然である。一段落目では初稿本らしきものを隠し
ておいたが流出したことを述べる場合にのみ過去の助動
詞が用いられている。三段落目も流出以前を述べる折に
使われた一箇所のみである。これらが意味しているのは、
まず下賜容認という場があり、それ以降に執筆が行
われ、ある程度まとまりができた頃、左中將によって持
ち出されて、世に広まった。この経緯を記したのが跋文
であるということだ。この跋文が初稿本に付されたもの
ではないのは明白であることからすれば、初稿本が世に
出て、ある程度の評価も得て、さらに書き継いだのがこ
の跋文が付された『枕草子』ということになるだろう。
そして、この跋文が付された理由を推測すれば、一つに
は作品の内容と関わるからであろう。

おわりに

一般には随筆とされる『枕草子』ではあるものの、そ
の内容が随筆的なものにとどまらないのは周知の事実で
ある。類想的、日記的、随想的と内容分類された²²ように、
この作品の内容は多岐にわたる。林和比古氏²³の言われる
ように、この作品が雑纂形態を本来的とすることにより
波及して結論付けるつもりはないが、少なくとも多様な
内容を持つことは、むしろ当初から予定されていたもの
であったのだろう。跋文二段落目で「枕にこそは侍ら
め」と発言した清少納言は、これまでの作品とは異なる
内容のもの、いずれにも属さないようなものを書くべき
だったからに違いない。清少納言に課せられたのは、歴
史ではなく、現在を映す記述であり、もちろん記録だけ
でも、また所謂物語でもないもの。まさに「目に見え心
に思ふこと」であった。津島氏²⁴は、「定子後宮の記録（存
在証明）となるもの、といった共通認識があったのだろ
う」とされた。だがそうであるならば、記録的な内容を
持つ章段が大勢を占めても良かったはずである。しかし
完成した作品がそうでないことは一目瞭然だ。定子後宮
の記録に主軸がおかれると、それは『史記』とまではい

かなくとも、歴史的な色彩が濃くなってしまふ。

『枕草子』の執筆当時、文学のジャンルについて一定の了解が成立していたことは、『土左日記』『蜻蛉日記』の記述からも知られる。つまり、あえてこの跋文を付したのは、多種多様な内容を持つこの作品について述べておきたかったという意図もあったことは認めてよいのではないか。このことからすれば、現在の内容こそ当初から予定されていた『枕草子』であったに違いない。もちろん、このような経緯で料紙が下賜されたとするならば、中宮定子にお目に掛けるのは当然のことである。だからこそ、左中將が清少納言の許から所謂初稿本を持ち出すということにも繋がったのであろう。

*本論内の引用本文は、特に断りのない限り、三卷本は『新編日本古典文学全集 枕草子』（小学館 一九九七年）、能因本本文は、『日本古典文学全集 枕草子』（小学館 一九七四年）による。一部表記を私に改めた箇所がある。

【注】

- (1) 『枕草子』の伝本はおおむね三卷本系統、能因本系統、前田家本、堺本系統の四種に分類されるのが通説である。前二系統を所謂雑纂本系統と称する。
- (2) 赤間恵都子氏『枕草子日記的章段の研究』（三省堂 二〇〇九年）、斎藤正昭氏『『枕草子』連想の文芸 章段構成を考える』（笠間書院 二〇一六年）では各章段の成立や構成、さらには成立時期について詳細な検討を加えており、大きな示唆を得た。
- (3) 『日本古典文学全集 枕草子』（小学館 一九七四年）
- (4) 『枕草子』（和泉書院 一九八七年）『新編日本古典文学全集』（小学館 一九九七年）、『新編枕草子』（おうふう 二〇一〇年）などいずれも跋文を四段落に分類しており、これらに従った。
- (5) 『新編日本古典文学全集 枕草子』（小学館 一九九七年）
- (6) 三田村雅子氏『枕草子 表現の論理』（有精堂 一九九五年）。「洒落」についても、底、鞍褥くらしきに對

して馬鞍^{まくら}などとする説もあるが、今は詳細には言及しない。

- (7) 坏美奈子氏『新しい枕草子論』（新典社 二〇〇四年）

- (8) 津島知明氏「『枕草子』執筆と流布の経緯——『跋文』の解釈から」（『國學院大學紀要』五六 二〇一八年二月）

- (9) 斎藤正昭氏『『枕草子』連想の文芸 章段構成を考える』（笠間書院 二〇一六年）

- (10) 片桐洋一氏「『枕草子』の基盤は和歌」（『百舌鳥国文』一七 二〇〇六年三月）

- (11) 五味文彦氏『『枕草子』の歴史学』（朝日新聞出版 二〇一四年）。丸山裕美子氏も『清少納言と紫式部』山川出版社 二〇一五年）で賛意を示している。

- (12) 三田村雅子氏『枕草子 表現の論理』（有精堂 一九九五年）

- (13) 坏美奈子氏『新しい枕草子論 主題・手法そして本文』（新典社 二〇〇四年）

- (14) 津島知明氏「『枕草子』執筆と流布の経緯——『跋文』の解釈から」（『國學院大學紀要』五六 二〇一八年二月）

- (15) 津島知明氏「『枕草子』執筆と流布の経緯——『跋文』の解釈から」（『國學院大學紀要』五六 二〇一八年二月）

- (16) 藤原定子の先行研究の代表的なものとしては、下

玉利百合子氏『枕草子幻想 定子皇后』（思文閣出版 一九七九年）、清水好子氏「宮廷文化を創る人——定子皇后の役割——」（『金欄短期大学研究誌』

一一 一九六六年五月）、三田村雅子氏「枕草子の表現構造——『日ざし』と宮仕え讃美と——」（『中古文学』二五 一九八〇年四月／『枕草子 表現

の論理』有精堂 一九九九年）、曾根正人氏「栄花物語の定子記述」（『平安時代の歴史と文学 歴史編』吉川弘文館 一九八一年）、坏美奈子氏「一

条天皇の辞世歌——『権記』記載の本文を読み解く」（『和洋国文研究』四七 二〇一二年三月／『王朝文学論』新典社 二〇〇九年所収）など。拙稿

「最期を演出した女性——一条帝皇后、藤原定子の遺詠三首をめぐって——」（『平安朝文学 表現の位相』新典社 二〇〇二年／『後拾遺和歌集攷』

二〇一九年）でも触れたことがある。

- (17) 津島知明氏「『枕草子』執筆と流布の経緯——

「跋文」の解釈から」(「國學院大學紀要」五六
二〇一八年二月)

(18) 津島知明氏『「枕草子」執筆と流布の経緯——

「跋文」の解釈から」(「國學院大學紀要」五六
二〇一八年二月)

(19) (一) 内上段の算用数字は、『新編日本古典文学全集 枕草子』の章段数、漢数字は、『新編 枕草子』(おうふう)の章段数。

(20) 赤間恵都子氏『「枕草子」の官職呼称をめぐって』
(『枕草子の新研究』新典社 二〇〇六年／『枕草子日記的章段の研究』三省堂 二〇〇九年)。人物呼称については、津島知明氏『枕草子論究』(翰林書房 二〇一四年)・「五味文彦『枕草子の歴史学』の「新説」を検証する」(『古典文学の常識を疑う』勉強出版 二〇一七年)もある。

(21) 萩谷朴氏『枕草子解環』(同朋舎 一九八三年)
最初に内容を三分類したのは、池田亀鑑氏「枕草子の異本に関する研究」(「国語と国文学」一九二八年一月)である。その後諸先学により、分類が試みられている。

(23) 雑纂形態を本来的と主張したのは、林和比古氏

『枕草子の研究』(雄文書院 一九六四年)が早い。
この説自体を肯定している訳ではない。これに対し、近年では、津島知明氏『枕草子論究——日記回想段の〈現実〉構成』(翰林書房 二〇一四年)・『「頭中将」齊信、〈記憶〉を託された男』(『枕草子論及』翰林書房 二〇一四年)・「奪回された〈定子〉の記憶」(「古代中世文学論考」三一 新典社 二〇一五年)・「秀句のある「対話」——『枕草子』九七段から一〇二段までの日記回想章段群——」(「國學院大學紀要」五四 二〇一六年一月)や、斎藤正昭氏『「枕草子」連想の文芸 章段構成を考える』(笠間書院 二〇一六年)に代表されるように章段の連繋や配列意図を探る論考も提示されている。

(24) 津島知明氏『「枕草子」執筆と流布の経緯——「跋文」の解釈から』(「國學院大學紀要」五六 二〇一八年二月)

*直接引用はしなかったが、津島知明氏「跋」の寄り添う『枕草子』——その本文の軌跡——」(「日本文学」四六一二 一九九七年)に様々な示唆を得た。

(本学教授)